面影

ハーン先生の一周忌に

小川未明

青空文庫

一

独り、道を歩きながら、考えるともなく寂しい景色が目の前に浮んで来て胸に痛みを覚えるのが常である。秋の夕暮の杜の景色や、冬枯野辺の景色や、なんでも沈鬱な景色が幻のように見えるかと思うと遽ち消えてしまう。

消えてしまった後は、いつも惘として考えるのである。なんでこんな景色が目に見えるのであろう。誰のことを自分は思っているのか？　気に留めて考えれば空漠として、悲しくも、喜ばしくもないが、静かに落付ていると胸の底から細い、悲しい、囁きのように、痛むともなく痛みを覚えて、沈鬱な寂寞たる夕暮の田園の景色などが瞭々と目の前に浮んで来る。

ああ、自分はなぜこんなに悲しい気になるのであろうか。もうも彼女のことは思い切っているのにと自から心を励ますけれど、熱い涙が知らずにぽたぽたと落ちる。物の哀れはこれよりぞ知るとよく言ったものだ。自分は曾て雑司ヶ谷の鬼子母神に参詣して御籤を引いたこともあったが……やはり行末のことや、はかない恋をそれとも知らなかったからである——この道を行けば、やがて鬼子母神の境内に出るのだが、もう草は枯れている。圃のものも黄ばんでしまった。なんだか斯う、彼女の面影が目に見えて来る。そういえばこの道を去る秋、共に通ったことがあったのである。

ああ、もうもう思うまい思うまい、悲しいんだやら、こう気が焦ってくるばかりで、やはりこれが悲しいんであろう。涙が知らずに湧いて来る。

どれ、ハーン先生の墓にでも詣ろう。……

二

思えば一昨年、ちょうど季節は夏の始めである。青葉の杜を見ても、碧色の空を見ても何となく、こう恋人にでも待たるるような、苦しいかと思うと悲しいような、又物哀れな慕わしげな気持のする頃であった。

自分は学校の窓から裏庭の羅漢松の芽の新なる緑を熟と見入て色々の空想に耽っていた。するとベルが鳴ってハーン先生が来たのである。この日初めて先生の顔を見るのだ。

先ず空想に浮んだのはこの人が希臘に生れ、西印度諸島や、その他諸方を流浪して来たと云うことである。背の低い眇目の、顔付のどことなくおっとりとした鼠色の服を着ていなさる、幾人の兄弟や、姉妹があり、父や母は何処にどうして、而して真面目な恋もあって、それが成就しなかったのではあるまいか。などと種々の空想を廻らしていた。やがて講義が終えてから、運動場に出て、羅漢松の木蔭の芝生の上に腰を下して漫々たる碧空に去来する白雲の影を眺めていると、霊動する自然界が、自ら自我に親しみ来るように思われる。そこいなき円い空、寂しそうな白雲、袂におとずれる風のささやき。雲を踏み、海を渡り、親もなく、兄弟もなき異郷に漂浪する、先生の身が可哀そうになって来る。今も尚お優しい余韻のある、情熱の籠っている講義の声が律呂的に耳許に響いているような。

而して熟々と穏かな容貌が慕わしうなり、又自分も到底この先生のようではないけれど、やはり帰趨なき、漂浪児であるという寂し

い感になった。

＊　　＊　　＊

この光栄ある詩人が、遽かに永劫の楽園を慕うて沈黙の海に消え、紫色の……さながら夢のような……さながら消えた悲みのような、遠いまた杳かな島山蔭の波間に見える、永劫の夏の浄土に憧がれ、漕いで行ってしまわれた夕暮、我れは悲しみにたえやらず、君の行方なつかしく、美しい茜色の西の大空を、野越え、山越え、森越えて眺めやり、松樹影暗く繁る、瘤寺の、湿れる墓畔に香を焼いて、縷々として寂寞の境に立ち上る、細い細い青烟の消えゆくを見るも傷ましく、幾たびも幾たびも空想を破る鐘の響に我れ知らぬ暗涙をたたえたことであった。——思うともなく、その日のことが思いだされて、未だにその時の光景が瞭々と目に浮んで来て堪えられぬ。

三

この春のことであった。北国のある町を歩いていると立琴のようなものを鳴らして乞食が通るのを見た。その男の容貌がいかにも「日まわり」の一章に読だ乞食と似ている。何となく悲しく、鳴らしている立琴の音を聞きつつ、空想に耽っているとその男の姿は遠くなって見えなくなった。……ああ、彼も漂浪人かと思うと、つい熱き涙が目の中に湧くのであった。

ハーン先生の文は、この琴の音の人をひく力のようにどこか哀れな寂しい、細い澄んだ響きを伝えていた。——何となく沈痛！　何となく悲哀！　の響きがある。

人生には悽惨の気が浸透している。春花、秋月、山あり、水あり、紅、紫と綺羅やかに複雑に目も文に飾り立てているけれど、帰する処沈痛悲哀の調べが附纏うて離れぬ。酔うたる人は醒むる時の来るが如く、楽める者、驕れるもの、悦べるもの、浮かるるもの早晩傷み、嘆き、悔い憂うる時の来ることを免れない。

誰か青春の美酒に酔うては歌わざらん。誰か凋落の秋に遭うては酸鼻せざらん。人生酔うては歌い、醒めては泣く、就中余は孤愁極りなき、漂浪人の胸中に思い到る毎に堪えがたき哀れを感じて、無限の同情を捧ぐるのである。

さすらい人！　いかなれば君独り愁え多きや。飛ぶ雲の影を見れば故郷の山を思い、うららかなる春の日に立つ野山の霞を見る時は、ありし昔の稚子の面影を偲ぶ。里川の流れ迢々たるも目に浮び、何処よりか風のもて来る余韻悲しき、村少女の恋の小唄も耳に入る。……故郷を離るる幾百里、望めば茫々として空や水なる海、山の上にも山ある山国に母を憶い、父を憶うて、恋しき弟妹の面影を偲ぶ心如何ならん。

さすらい人！　いかなれば君独り愁え多きや。男子苛も志を立てて生活の戦場に出で人生に何等かの貢献を試んと決したる上は、たとえ腸九たび廻り、血潮の汗に五体は溷るとも野に於いて、市に於いて、鋤に、鍬に、剣に、筆に奮迅の苦闘を敢てする腕も、勇気もあるものの、只彼の浮世の風波に堪え得ぬ花の如き少女、おお、我が恋人は今頃いかに、今宵をいかに送るならんと空の彼方、見よ月に雲のかかり、忽ち勇気の挫けて暗に落ち行く心地せらる。……煩

悶……懐疑……ああ、いかなればさすらい人！　かく君独り愁え多きや。

ラフカディオ・ハーン先生はた一個のさすらい人であると思う。

＊　　＊　　＊

見渡せば霞立つ春の海原。波静かなる、風穏かなる、夢にも似たる青き遠山を見るにつけ、黄色なる入江の沙上の舟や、灰色の市街を見るにつけ、子の文章を思い起すのである。

北国の春の空色、青い青い海の水色、澄みわたった空と水とは藍を溶したように濃淡相映じて相連なる。望む限り、縹緲、地平線に白銀の輝を放ち、恍として夢を見るが如し。彼の浦島太郎が波間に浮べる、故郷の山影の、夢のような景色を眺めたのも、こうであったろう⁉　「夏の日の夢」の記を読んで、今、記憶に残っているのは左の一節である。

〝Summer days were then as now, —— all drowsy and tender blue, with only some light, pure white clouds hanging over the mirror of the sea.〟

日本海の風に吹かれて、滄浪の寄せ来る、空の霞める、雲も見えず、麗かなる一日を海辺にさまよい、終日空想に耽っていたことがあるが、その時子の文章と閲歴とを思い出さずにはいられなかった。赤、黄、緑、青、何でも輪郭の顕著なる色彩を用い、悠々たる自然や、黙静の神秘を物哀れに写す力があったのが彼の人の特長である。

自分は希臘の海を見ないけれど、我が春の海を見るたびに何となく懐かしく思う。ああ、緑なる空。青き海原を見れば希臘の空を思い、悠々と白き雲の飛ぶ影を見れば、さすらい人を思い、月の光を見ては愁え、貝を拾うては泣き、悲しく吹く風に我が恋人の身の上を思い煩らうのである。

四

ただ独り、黄ばんだる林の下道を歩いて、青い空の見える淋しい湿り勝な小道を行くと、涼しい秋の風が身に浸み、何となく痛みを胸に覚ゆるのである。広い圃の中に出ると、小春日に、虚空を赤蜻蛉が翻々と、かよわく飛んでいるのやら、枯れた足元の草の上に止っているのもある。遠く、うす黒き烟の、大空に溶けるように上っているのも見える。けれど何等の響きも聞えない。左に小道を折れれば、例の墓所に出るので、誰れ見るともなく、静かな秋はいつとなく暮て行くのである。

自分はこの眩しいような空を眺めて、何となく悲しくなった。

ある日、講義の時間に「とんぼつり、今日はどこまで行ったやら」の句を、

〝Catching dragon-flies! ..... I wonder where he has gone to-day!〟

詩人の情のこもれる、やさしい声で而も物哀れに語られたことがあった。而してその時に自分は稚児が現世ならぬ薄青い夢の世の熱い夏の真昼頃、なんでも広い広い桑畑でただ独り、その裡をさまよいながら、蜻蛉を取っている姿のありありとして見られたのである。

＊　　＊　　＊

不思議なるは人生の行路、誰か自分の運命を知るものがあろう。

……ふりさけ見れば千万里、海や、雲を隔てて異郷の土に冷(ひや)かに眠るさすらい人の身を哀れむのである。而してもう、あの柔和な面影は再び見られない。艶麗(えんれい)な筆も既に霊なきものとなった。

ただ永劫に吹く風の、悲しい余韻を伝えるばかり。

自分は茫(ぼう)として人の身の上を思うていたが、やがてまた我が身の上を悲しく感ずるのである。光明の郷に憧がれて、迷う孤雲の如く、幽(かす)かなる光を放ち、漫々たる西の大空に浮ぶ。暗(やみ)、愁(うれ)え何処に果(はて)は落ち行くであろう。……うす紫に匂う、希望の星の光は遠い。……去年(こぞ)の秋、この道を歩いた時は、恋しい影が従(つ)いていたものを……今は思いにやつれしさすらい人！

いでやこの涙を捧げものにして詩人の墓を訪(と)おう。……ああ、おそろしい風！　このあたりは落葉で径(みち)も見えぬ。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選　小川未明集　幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房
　　2008（平成20）年8月10日第1刷発行
　　2010（平成22）年5月25日第2刷発行
底本の親本：「定本　小川未明小説全集1　小説集※［#ローマ数字1、1-13-21］」講談社
　　1979（昭和54）年4月6日第1刷発行
初出：「家庭新聞」
　　1905（明治38）年9月
入力：門田裕志
校正：坂本真一
2017年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

面影

ハーン先生の一周忌に

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　小川未明
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/